

アナーキズム文芸の態度

一

アナーキズム文芸とは、ひとくちに言つてどういふことだと訊ねる人に対して、わたくしは常にこう答える。それは、「民衆もしくは大衆の文芸」である。他の文芸はブルジョアと呼ばれ、プロレタリアと称しているすべての文芸を通じて、「支配者もしくは指導者の文芸」だ。

二

近い例を引くならば、それらの指導者文芸の特徴は、態度を「上から下へ」におき、目標を「教化」におく。作の範囲の限定せられ、その質の公式化するの所以である。それに反してアナーキズム文芸は、態度を「下から上へ、横へ」におき、目標を「戦闘」または「糾合」と共に「われわれの世界の文化建設」におく。作の範囲の無限であり、質の自由

な所以だ。

三

「近代の不思議は芸術が民衆を発見したことにある」とロマン・ローランがいつている。この言葉ほど、従来および現在の支配者または指導者文芸を言い現わしたものはない。われわれがブレハノフ、ルナチャルスキーを一頁読めば、右の言葉の具体的表現がいかにされているかを、適確に知ることができる。これに対してわれわれはこういふのだ。

「近代の不思議は民衆が芸術を発見したことにある」

四

従来、もしくは現在における指導者文芸観にあつては、文芸家なるものは、民衆に「臨ん」でいる、もしくはそれを「対立」している。即ち民衆とは「別種」のものであるという根本的の見解に立っている。文芸なるものは、常にこの別種の特定種族によつて作られるものであるというのだ。これが歴代社会（権力支配と私有財産を基礎とする）を通じての共通の見方だ。

その特殊種族は、ある時代にあつては幫間（ほうかん）であり、他の時代にあつては指導者である。が、その何れにしても、民衆に対して「別種」の存在であることには変りはない。かのギリシヤ時代にあつては、文芸は奴隷の手によつて作られるものであるとした。知識的奴隷すなわち幫間の手によつて。近代唯物史観的の見方もこれと変らない。「知識階級は幫間」であるという合言葉の上に立つての見方にあつては、その幫間は常に勢力ある階級を目がけるゆえに、「民衆」が勢力をもつとするとそれに拠るのである。されば彼等は始めて「民衆」に注意し、「民衆」を描く。ロマン・ローランがいつた近代の不思議は「芸術が民衆を発見」したことだというのがこれだ。「芸術」なるものは知識階級の特産であるから、その知識階級が、今や、「民衆」を発見したことはすなわち、その「芸術が民衆を発見する」結果となることは当然のことなのだ。

いま一部にあつて、プロレタリア文学の名を僭称しているマルクス唯物史観文学の根本的の性質は、そこに存在する。早くいえば、プロレタリア文学なるものは、プロレタリアを発見した知識階級の文学である。このことを吟味することは一つの重要なことだ。つまり早くいえば、文学は「文芸家」のもので、「民衆」のものではないという従来および現

在の支配者側の見方をそのまま踏襲しているのみか、それに物的価値づけをすら行つた唯物史観的の有名な「知識階級観」およびひいてその「文芸観」の吟味さるべきことが今や必要となつてきたのだ。

彼等は、「知識階級は幫間」であるという所の「知識階級観」に拠つてゐる。だが、われわれはそれをそのまま受けとつてはならない。その「幫間階級」なるものは呼び方の上では賤視的であるが、実質的には幫間どころか「指導もしくは支配者」としての「特権階級」であり、それらんとする野心の上に立つものであることを見抜かねばならない。今日の既成政治家は、そのいずれもが「民衆の公僕」であることを吹聴している。だが、事実はどうだ。

公僕とか、幫間とか、その他呼び方はどうでもいい。ともあれそれらの名において、それらの階級の「存在を認め」るところに重大な欺瞞的な方法がある。

われわれはこのトリックに陥ちこんではならない。われわれはそれらの階級の「存在を否定」する目標のもとに、われわれは「知識階級」を解体せしめて知識をそれらの特定階

級の手から、民衆の手に奪い返えし、芸術や科学を、一部の芸術家科学家の手から、われわれの手へ取りもどすにある。

九

彼等は、芸術や科学は、その時代における支配階級の、御用的幫間者の手になるものであるとする。かかる定義は、民衆をゴマ化して、御用幫間階級に實際的の利益をあたえ、その存在を擁護しようとする奸計に出ているのだ。

彼等は芸術や科学を、ある特定専門家の、専門的産物であるという見解に立つ。が、これに反してわれわれはそれは民衆のすべてがもつ本能の一種であるという主張に立つのだ。

十

われわれは性欲、食欲の二本能と等しき意味において、芸術、科学の二本能をもつ。ただ従来の特権と私有の制度が、他のすべてのものを搾取したのと同じ意味において、われわれの芸術本能とその自由、科学本能とその自由、をも搾取したのである。いまや、われわれは、あらゆる搾取されたものを奪い返す立場において、目ざめつつある。この意味において、われわれの文芸観は「われわれ民衆のものとしての文芸」であるところに「出発」する。

十一

従来、もしくは現在ブルジョアと呼ばれ、プロレタリアと称しているあらゆる幫間もしくは指導者文芸に対して、われわれの文芸が鋭く対立する所以は右にいった通りだ。

十二

われわれはいわゆるプロレタリア文芸なるものの、その上すべりの「勝利？」の影に早くも源泉の固濁を見る。真の被支配者の文学は、被支配者そのものの実際的の歩みの遅々としているそのように、徐々と、もしくはは一步から一步へと、あらゆる文化的価値の発見、大きな範囲における自由な創造（そうであればあるほどそれは新社会における必然的の創造の大きさを物語る）と同時に、現在における支配勢力に対する偉大なる戦いを戦うべく決定されているのだ。さればこの偉大な戦闘と創造とは、公式的、既定的の、しかも教化的、伝統的のありふれた偏見に立つ文芸観およびその行動によっては断じて不可能なのだ。

無産婦人芸術連盟 綱領

一、われらは強権主義を排し、自治社会の実現を期す。

標語 強権主義否定！

二、われらは男性専制の日常的事実の暴露清算を以て、一般婦人を社会的自覚にまで機縁するための現実的戦術とする。

標語 男性清算！

三、われらは新文化建設および新社会展開のために、女性の立場より新思想新問題を提出する義務を感じる。

標語 女性新生！

『婦人戦線』創刊号（昭和五年三月）より